

半七捕物帳

むらさき鯉

岡本綺堂

青空文庫

「むかし者のお話はとかく前置きが長いので、今の若い方たちには小焦れこじりたいかも知れませんが、話す方の身になると、やはり詳しく説明してかからないと何だか自分の気が済まないというわけですから、何も因果、まあ我慢してお聴きください」

半七老人は例の調子で笑いながら話し出した。それは明治三十年の十月、秋の雨が昼間からさびしく降りつづいて、かつてこの老人から聴かされた「津の国屋」の怪談が思い出されるような宵のことであつた。今夜のような晩には又なにか怪談を聴かして

くれませんか、私がいっもの通りに無遠慮に強請^{ねだ}りはじめると、老人はすこしく首をひねって考えた後に、面白いか面白くないか知りませんけれども、まあ、こんな話はどうぞでしょうね、とおもむろに口を切った。

その前置きが初めの通りである。

「いや、焦れたいどころじゃありません。なるだけ詳しく説明を加えていただきたいのです」と、わたしは答えた。「それではないと、まったく私たちにはよく判らないことがありますから」「お世辞にもそう云ってくだされば、わたくしの方でも話が仕よいというものです。まったく今と昔とは万事が違いますから、そこらの事情を先ず呑み込んで置いて下さらないと、お話が出来ま

せんよ」と、老人は云った。「そこで、このお話の舞台は江戸川です。遠い葛飾かつしかの江戸川じゃあない、江戸の小石川と牛込のあいだを流れている江戸川で……。このごろは堤どてに桜を植え付けて、行灯をかけたり、雪洞ほんぼりをつけたりして、新小金井などという一つの名所になってしまいました。わたくしも今年の春はじめて、その夜桜を見物に行きましたが、川には船が出る、岸には大勢の人が押し合って歩いている。なるほど賑やかいので驚きました。しかし江戸時代には、あの辺はみな武家屋敷で、夜桜どころの話じゃあない、日が落ちると女一人などでは通れないくらいに寂しい所でした。それに昔はあの川が今よりもずっと深かった。というのは、船河原橋の下で堰せき止めてあったからです。なぜ堰き止

めたかというと、むかしは御留川おとめがわとなっていて、ここでは殺せつし
生よう禁断、網を入れることも釣りをすることもできないので、鯉
のたぐいがたくさんに棲んでいる。その魚類を保護するために水
をたくわえてあったのです。勿論、すっかり堰せきいてしまつては、
上から落ちて来る水が両方の岸へ溢れ出しますから、堰せきは低く出
来ていて、水はそれを越して神田川へ落ち込むようになってい
るが、なにしろあれだけの長い川が一旦ここで堰かれて落ちるので
すから、水の音は夜も昼もはげしいので、あの辺を俗にどんどん
と云っていました。水の音がどんどんと響くからどんどんという
ので、江戸の絵図には船河原橋と書かずにどんど橋と書いてある
のもある位です。今でもそうですが、むかしは猶さら流れが急で、

どんだんのあたりを蚊帳ケ淵かやぶちとも云いました。いつの頃か知りませんが、ある家の嫁さんが堤を降りて蚊帳を洗っていると、急流にその蚊帳を攫さらつて行かれるはずみに、嫁も一緒にころげ落ちて、蚊帳にまき込まれて死んでしまったというので、そのあたりを蚊帳ケ淵と云つて恐れていたんです」

「そんなことは知りませんが、わたし達が子どもの時分にもまだあの辺をどんだんと云つていて、山の手の者はよく釣りに行ったものです。しかし滅多めったに鯉なんぞは釣れませんでした」

「そりゃあ失礼ながら、あなたが下手だからでしょう」と、老人はまた笑つた。「近年まではなかなか大きいのが釣れましたよ。まして江戸時代は前にも申したような次第で、殺生禁断の御留川

になつていたんですから、魚は大きいのがたくさんいる。殊にこの川に棲んでいる鯉は紫鯉というので、頭から尾鰭までが濃い紫の色をしているというのが評判でした。わたくしも通りがかりにその泳いでいるのを二、三度見たことがあります、普通の鯉のように黒くありませんでした。そういう鯉のたくさん泳いでいるのを見ていながら、御留川だから誰もどうすることも出来ない。しかしいつの代にも横着者は絶えないもので、その禁断を承知しながら時々阿漕あこぎの平次をきめる奴がある。この話もそれから起つたのです」

文久三年の五月なかばである。毎日降りつづく五月雨さみだれもきよう

は夕方からめずらしく小歇こやみになったが、星ひとつ見えない暗い夜に、牛込無量寺門前の小さい草履屋の門かどをたたく者があつた。無量寺門前というのは今日の築土八幡町である。このごろは雨つづきで草履屋ぞうりやの商売も休みも同様であるばかりか、亭主の藤吉は宵から出ているので、女房のお徳は店を早く閉めて、奥の長火鉢の前で浴衣ゆかたの縫い直しをしている時、表の戸をそつと叩く音がきこえたので、お徳は針の手をやめて顔をあげた。今夜ももう四ツ（午後十時）に近い。この夜ふけに買物でもあるまい。おそらく道をきく人でもあろうかと思つたので、かれは坐つたままで声をかけた。

「はい。なんでございます」

外では又そつと叩いた。

「どなたですか。お買物ですか」と、お徳はまた訊いたき。

「ごめん下さい」と、外では低い声で云った。

なんだか判らないので、お徳もよんどころなしに起ちあがった。狭い店さきへ出て、再び何の用かと訊くと、外では女の細い声で、御亭主にちよつとお目にかかりたいという。内の人は唯今留守ですと答えると、それではおかみさんに逢わせてくれというので、お徳はともかくも表の戸をあけると、ひとりの瘦形の女が夜目にも白い顔をそむけて、物思わしげに悄然とたたずんでいるのが薄暗い行灯あんどうの火にぼんやりと照らし出された。

「なにか御用でございますか」

「はい。あの、失礼でございますが、お店へあがりましてもよろしゅうございましょうか」と、女は忍びやかに云った。

見ず識らずの女が夜ちゆうに人の店へあがり込もうというのは、なんだか胡散らしいとも思ったが、お徳はもう三十を越している。相手は弱々しい女ひとり、別に恐れるほどのこともあるまいと多寡をくくつて、そのまま店へあがらせると、女はうしろを見かえりながらそつと表の戸を閉め切つてはいった。そうして、なにを云い出すかと、お徳は相手の俯向き勝ちの顔をのぞくように見ていると、女はやがて低い声で云い出した。

「夜ふけに伺いまして、だしぬけにこんなことを申し上げるのも異なるものでございますが、わたくしはこの御近所に居りますもの

で、昨晚不思議な夢を見ましたのでございます」

「はあ」と、お徳も不思議そうに相手をいよいよ見つめた。思いも付かないことを云い出されて、かれは少しく煙けむにまかれたのであつた。

「ひとりの男……むらさきの着物を被きて、冠かんむりをかぶった上品な人でございました。それがわたくしの枕もとへ参りまして、自分の命はきよう翌日あすに迫っている。どうぞあなたの力で救っていただきたいと、こう申すのでございます。そこで、一体あなたは何処のお方ですかと訊きますと、わたくしは無量寺門前の草履屋ぞうりやの藤吉という人の家うちにいる。そこへお出でになれば自然にわかると、云うかと思うと夢が醒めました。なにぶんにも夢のことでござい

ますから、そのままにして置きましたのですが、夜になって考えますと、なんだか気にもなりますので、とうとう思い切つて今時分に伺いましたようなわけですが……」

いよいよ判らないことを云い出すので、お徳はただ黙つて聴いていると、女はひと息ついて又語り出した。

「それも夢だけのことでございましたら、わたくしもそれほどには気にかけないのでございますが、実はけさになつてみますと、枕もとに魚の鱗こけのようなものが一枚落ちていましたので……。それは紫がかった金色こんじきに光つているのでございます」

お徳の顔色は俄かに動いて、おもわず台所の方をみかえると、そこでは大きい魚の跳ねるような音がきこえた。女客も俄かに耳

を引つ立てた。

「あ、奥で何か跳ねるような……」

お徳はやはり黙っていた。

「唯今申し上げたことで、何かお心あたりのようなことはござい
ますまいか」と、女はしずかに云った。

「別にどうも……」と、お徳はあいまいに答えたが、その声は少
しふるえていた。

「まったくお心あたりはないでしょうか」

台所ではまた魚の眺ねる音がきこえた。女はその物音のする方
を伸びあがるようにして覗のぞきながら、また云い出した。かれの声
も少しふるえていた。

「お願いでございます。お心あたりがございますならば、どうぞ教えていただきたいのでございませうが……」

その訴えるような声音こわねが一種の恨みを含んでいるらしくも聞えたので、お徳はまた俄かにぞつとした。さつきからの話を聴いて、お徳も内々は思いあたること無いかもなかつたのである。実を云うと、夫の藤吉はこのあいだから彼の江戸川かのどんど橋のあたりへ忍んで行って、禁断のむらさき鯉びきの夜釣りをして、現にゆうべも一尾の大きい鯉を釣りあげて来た。それに味を占めて、かれは今夜も宵から釣道具を持ち出して行ったのである。ゆうべの鯉は盥たらいに入れたままで台所の揚げ板の下に隠してある。それを知っているらしい彼の女は、いったい何者であろうかと、お徳は不安

に思った。

女の話がほんとうであるとするれば、鯉がその夢に入つて救いを求めたものであろう。もし又それが嘘であるとすれば、夫が殺生禁断を犯しているのを知つて、ひそかにその様子を探りに来たのかも知れない。どちらにしても薄気味のわるい女客を、お徳はどうあしらつてよいか判らなかつたが、この女が入り込むと同時に、今までおとなしかつた台所の鯉が俄かにたびたび跳ねあがるのも不思議であるばかりか、女の顔に愁いを帯び、女の声に恨みを含んでいゝらしいのが、お徳をいよいよ恐れさせた。あるいはその夢ばなしは作り事で、この女はかのむらさき鯉に何かの因縁のあるものではあるまいかという疑いも湧き出して、かれは更に薄暗

い行灯の灯かげで女の姿をよく視ると、女の髪は水を出て来たように湿ぬれていた。今は雨も止んでいるのに、かれはどうして湿れて来たのかと、お徳のうたがいは一層強くなった。この女は水から出て来たのではあるまいかと思うと、気の強い女房も俄かにぞつとしたのである。

「あの、奥の方で何か跳ねているのは、なんでございましょう」と、女は訊きいた。

「そんな音がきこえましたか」と、お徳は白らばつくれてこたえた。「雨だれの音じゃありませんかしら」

その苦しい云い訳を打ち消すように、台所の鯉はまた跳ねた。

「おかみさん、どうぞお隠しなさらなくてください」と、女はい

よいよ恨めしそうに云った。「唯今も申す通り、わたくしの枕もとに紫の鱗が落ちていました。奥で今跳ねているのは確かに魚でございます。魚の跳ねる音でございます。一生のおねがいでございますから、どうぞその魚を一度みせてください。その魚はきつとむらさきに相違ございません」

お徳ももう返事に困って、唯おどおどしていると、女の様子がだんだんと物凄く変つて来た。

「ごめんください。ちよつと奥へ行つて拝見してまいります」

女は起つて奥へゆきかけるのを、お徳はさえぎる力もなかつた。女の起つたあとを見ると、その畳の上は陰くもつたように湿ぬれているので、かれは又ぞつとした。

むらさきの鯉は怪しい女の手によつて、台所のあげ板の下から持ち出された。鯉はかれの両袖にかかえられて、おとなしく運び去られるのを、女房は唯うっかりと眺めていると、女は帰るときにお徳に云つた。

「どうもありがとうございます。今のわたくしとしては別にお礼の致しようもございませんが、これからは蔭ながらおまえさん方夫婦の身の上を守ります」

かれは足音もしないように表へ出て、その姿は五月さつきの闇に隠さ

れてしまった。それを見送つて、お徳はほつとした。かれは夢をみているのではないかと疑つたが、だんだんに落ち着いてかんがえると、怪しい女はどうも江戸川の水の底から抜け出して来たらしく思われてならなかつた。それが普通の人間ならば、いかに夢の告げがあつたからといつて、人の家の魚をただ取つてゆくと
いう法はない。それに対して相当の償つぐないをしてゆくべき筈であるのに、今のわたくしとしては別にお礼のしようもないと彼女は云つた。その代りに、蔭ながらお前たち夫婦の身の上を守るとも云つた。そんなことは普通の人間の云うべき詞ことばではない。かれはおそらく一種の霊あるものであろうと、お徳は想像した。そうして、かれが再び引つ返して来るのを恐れるように、お徳は表の戸に栓

をおろした。

「それでもすなおに鯉をわたしてやってよかつた。うつかり逆らさかつたらどんな祟りを受けたかも知れない」

禁断の魚を捕るということがすでに逃がれがたい罪である。その不安に絶えずおびやかされている矢さきへ、測はからずも今夜のよ
うな怪しい女に襲われて、お徳はいよいよその魂をおののかせた。
夫が帰つたならばすぐにこの話をして聞かせて、今夜かぎりに夜
釣りを止めさせなければならぬと思ひながら、再び長火鉢の前
に坐りかけると、檐のきの雨だれの音がときどきに聞え始めた。又ふ
り出したのかと耳をかたむけると、雨の音はだんだんに強くなる
らしい。それが今夜のお徳に取り分けて侘わびしくきこえて、洗いぎ

らしの単衣ひとえの襟がなんだか薄ら寒く感じられた。かぜでも引いたのかと、肩をすくめて身ぶるいする時、表の戸を軽くたたき音がきこえた。亭主が帰つて来たのだらうと思ひながら、さっきの女客におびえているお徳はすぐに起つのを躊躇していると、外では焦しれるように小声で呼んだ。

「おい。もう寝たのか」

それが夫の声であると知つて、お徳は先ず安心した。

「おまえさんかえ」

「むむ、おれだ、おれだ。早くあけてくれ」と、外では小声で口早に云つた。

お徳は急いで表の戸をあけると、竹の子笠をかぶつた藤吉がず

ぶ濡れになってはいって来た。かれは手になんにも持っていないなかつた。

「釣り道具は……」と、お徳は訊いた。

「それどころか、飛んだことになってしまった」

手足の泥を洗って、湿ぬれた着物を着かえて、藤吉はさも疲れ果てたように長火鉢の前にぐったりと坐つた。かれは好きな煙草ものまないで、まず火鉢のひきだしから大きい湯呑みを取り出して、冷めさかかっている薬や罐かんの湯をひと息に三杯ほども続けて飲んだ。ふだんから蒼白い彼の顔が更に蒼ざめているのを見て、女房の胸には又もや動悸が高くなつた。

「おまえさん。どうしたのよ」

気づかわしそうにのぞき込む女房の眼のひかりを避けるように、藤吉はうつむきながら溜息をついた。

「悪いことは出来ねえ。どうも飛んだことになった」

「だからさ、その飛んだ事というのは……。焦れたい人だねえ。早く、はつきりとお云いなさいよ」

「実は……。為さんが川へ引き込まれた」

為さんというのは、町内のちいさい紙屋の亭主で、草履屋とはまったく縁のない商売でありながら、藤吉とは子供のときの手習い朋輩といい、両方がおなじ釣り道楽の仲間であるので、ふだんから親しく行きかいて、岡釣りに沖釣りに誘いあわせて行くことも珍らしくなかった。その道楽が遂に二人を禁断の釣り場所へ

導くようにもなつたので、お徳は自分の亭主の罪を柵にあげて、その相棒の為さんを悪い友達としてひそかに怨んでいた。しかも、その為さんが川へ引き込まれたと聞いては、かれも驚かずにはいられなかつた。

「為さんが引き込まれた……。河童かっぱにかえ」

「河童かわうそや河獺さかなじゃあねえ。魚さかなにやられたんだ。おれも驚いたよ」

と、藤吉は顔をしかめてささやいた。「いつもの通りに堤どてを降りて、ふたりが列ならんで釣っていると、やがて為さんが小声で占めたと云つたが、なかなか引き寄せられねえ。よつほど大きいらしいから跳ねられねえように気をつけねえよと、おれも傍から声をかけたが、なにしろ真つ暗だから見当が付かねえ。それでもどうに

かこうにか綾なして、だんだんに手元へひき寄せたらしく、為さんは手網たもを持って掬いあげようとする。その途端に、今まで暗かった水の上が急に明るくなって、なんだか知らねえが金のようにぴかぴかと光ったものがあるかと思うと、大きい魚が跳ねかえる音がして、為さんはあつという間もなしにすべり込んでしまったので、おれもびっくりして押えようとしたが、もういけねえ。暗さは暗し、このごろの雨つづきで水嵩は増している。しよせん手の着けようもねえので、おれも途方に暮れてしまったが、それでも川下かわしもの方へ流されて行くうちには、どこかの岸へ泳ぎ付くところがあるかも知れねえと、暗い堤下を探るようにして、どんだんの堰せきの落ち口まで行って見たが、真つ暗な中で水の音がどんどと

きこえるばかりで、為さんの上がって来る様子はねえ。為さんもひと通りは泳げるんだが、なにしろ馬鹿に瀬が早いからどうにもならなかったらしい」

「おまえさん、呼んでみればいいのに……」と、お徳は喙くちを容れた。

「それが出来ねえ」と、藤吉は首をふつてみせた。「これがほかの所なら、為さんと呼ぶばかりじゃあねえ。大きい声で近所の人を呼んで、なんとか又、工夫くふうのしようもあるんだが、なにをいうにも場所が悪い、うっかり大きな声を出してみろ、こっちの身上にもかかわることだ。もうこうなったら仕方がねえ、これもまあ為さんの運の悪いのだと諦めて、おれもそのまま帰って来たが、

どうも心持がよくねえ。ああ、忌^{いや}だ、忌^{いや}だ」

「ほんとうに忌だねえ」と、お徳も溜息をついた。「だから、あたしがお止しと云うのに、お前さん達が肯^きかないで出て行くからさ。為さんのことばかりじゃあない、内にも忌なことがあつたんだよ」

「どんな事があつたんだ」と、藤吉は不安らしく慌てて訊いた。

「まさか為さんが来た訳じゃあるめえ」

「為さんが来るものかね。ほかに何だかおかしい女が来たんだよ」

怪しい女に鯉を抱え出された一件を女房の口から聴かされて、藤吉はいよいよ顔の色を変えた。

「そりやあどうもおかしいな。その女はいつてえ何者だろう」

「ねえ、もしや川から出て来たんじや無いかしら」と、お徳は摺り寄つてささやいた。

「むむ。おれも何だかそんな気がする。ゆうべ釣つて来たのは雄おすの鯉で、その雌めすが取り返しに来たんじやあるめえかな」

「返してやったからいいようなものだが、なんだか気味が悪いね」
「どうも変だな」

と、藤吉は今更のように表をみかえつた。

「外では為さんがあんなことになる。内ではそんな女が押し掛け
て来る。どう考えても、むらさきが俺たちに祟こっているらしい。
まったく悪いことは出来ねえ。もう、もう、これに懲こりて釣りは
止めだ」

「それにしても、越前屋の方はどうするの。まさかに知らん顔をしてもいられまいじゃないか」

「それをおれも考えているんだ。おれと一緒に行くことは、おかみさんも知っているんだからな」

「それだから知らん顔はしてられないと云うのさ。おまえさん、これから行つて早く知らしておいでなさいよ」

「これから行くのか」と、藤吉は再び顔をしかめた。

「だって、打っちゃつては置かれまいじゃないか。夜が更ふけても直ぐそこだから、早く行つておいでなさいよ」

追い出すように急せぎ立てられて、藤吉は渋々ながら出て行つた。

「あの人はなにをしているんだろう」

それから二ふたとぎ一刻あまりを過ぎても亭主の藤吉は帰らないので、

お徳はまた新らしい不安を感じ出した。そのころの二刻といえは今の四時間である。藤吉が出て行ったのは四ツを少し過ぎたところで、市ヶ谷八幡の鐘が夜の八よるツ（午前二時）を撞ついてからもう小半刻も経ったかと思うのに、かれはまだ帰って来なかつた。あるいは越前屋の女房にたのまれて、為さんの死骸を探しにでも行ったのかとも思ったが、何分にもいろいろの奇怪な事件がそれからそれへと続出するのにおびやかされている彼女は、どうも落ち着

いてはいられないような気がするので、更けてますます降りしきる雨の中を越前屋へたずねて行つた。

越前屋は小半町しか距はなれていないので、すぐに行き着くと、紙屋の店は表の戸をおろしてひっそりしている。常の時ならばそれが当然であるが、今夜こんなに寝鎮しづまっているのをお徳はすこし不思議に思いながら、ともかくもそつと戸を叩くと、内では容易に返事がなかつた。焦しれて幾たびか強く叩くと、小僧の寅次が寝ぼけ眼まなこをこすりながら起きて来た。

「あの、内の人^はは来ていますかえ」と、お徳は待ちかねて訊きいた。

「いいえ」

「来ていませんか」

「今時分藤さんが来ているものか」と、寅次は腹立たしそうに云った。

「おかみさんは……」と、お徳はまた訊きいた。

「奥に寝ていますよ」

「旦那は……」

「旦那も寝ていますよ」

お徳はびっくりした。鯉を釣りあげ損じて、川流れになった筈の為さんが無事に寝ているというのは案外であった。ほんとうに寝ているのかと念を押すと、寅次は確かに寝ていると云った。ゆうべ何処へ行って、何なんどき刻ときに帰かえって来たかと詮議すると、旦那は五ツ（午後八時）頃まわに出て行って、四ツ少し過ぎに帰かえって来たら

しい。自分は四ツを合図に店を閉めて寝てしまったから、よくは知らないと言った。それでもお徳の不審はまだ晴れないので、旦那がおかみさんを起こしてくれと又頼むと、寅次は不承ふしよう不承ふしように奥へはいったが、やがて女房のお新を連れ出して来た。

「あら、お徳さん。今時分どうしたの。藤さんが急病人にでもなつたんですか」と、お新は不思議そうに云った。

「実はこちらへ来ると云って、ふた刻も前に出たんですが、まだ帰って来ないので、なにをしているのかと様子を見に来たんですよ」と、お徳は正直に答えた。

「藤さんが……」と、お新は眉をよせた。「今夜は一度も見えませんが」

「あら、そうですか」

お徳は煙けむにまかれてぼんやりと突っ立っていた。ゆうべからの事をかんがえると、かれはやはり夢でも見ているのか、それとも八幡の森の狐にでも化かされているのかと、自分で自分を疑うようにもなった。

「為さんはお内ですね」

再び念を押すと、お新は内にいるとはつきり答えた。その上に詮議のしようもないので、お徳は気が済まないながらも一旦は空むなしく引き揚げるのほかはなかった。

「藤さんは浮気者だから、この家うちへ来るなんて旨いことを云つて、どっかへしけ込んでいるんじゃないやありませんかえ」と、お新は

笑っていた。

年下の女にからかわれて、この場合、お徳も少しむつとしたが、そんなことを云い争っている時でもないので、かれはそれを聞き流してそうそう忽々に帰った。それにしても亭主はどこへ行ったのであろう、もしや留守のあいだに帰っているかも知れないと、急いで内へはいつてみると、内は行灯を消したままで藤吉はまだ帰っていないかった。

死んだはずの為さんは生きていて、生きていたはずの亭主がゆくえをくら晦ましたのである。為さんは無事に泳ぎついて助かったのかも知れないが、亭主のゆくえ不明がどうしても判らなかつた。それともお新の云うように、いい加減のこしらえ事をして何処か

の色女のところ、に隠れ遊びをしているのかと、お徳は半信半疑のうち、にその夜をあかした。

雨はあけがた方から又ひとしきり止んで、梅雨とは云つても夏の夜は早く白しらんだ。ゆうべは碌々に眠らなかつたお徳は、早朝から店をあけて亭主の帰るのを待つていたが、藤吉はやはりその姿をみせなかつた。もう一度、越前屋へ行つて、亭主の為さんに逢つて、くわしいことを詮議して来ようと思つてゐるところへ、飛んでもない噂がここらまで伝わつてお徳をおどろかした。藤吉の死骸が江戸川のどんど橋の下に浮かんでいたというのである。自分が追ひ立てるようになして越前屋へ出してやつた亭主の藤吉が、どうして再び江戸川の方角へ迷つて行つて、そこに身を沈めるようにな

ったのか。ゆうべ死んだというのは、為さんでなくて藤吉であったのか。ゆうべ帰つて来たのは幽霊か。なにが何やら、お徳にはちつとも判らなくなつてしまつた。

なにしろ其の儘にしては置かれないので、お徳はとりあえずその実否じつびを確かめに行こうとすると、家主いえぬしもその噂を聴いて出て来た。家主と両隣りの人々に付き添われて、お徳はこころも空に江戸川堤へ駈けつけると、死骸はもう引き揚げられていた。あらごも菰をきせて河岸の柳の下に横たえてある男の水死人はたしかに藤吉に相違ないので、付き添いの人々も今更におどろいた。お徳は声をあげて泣き出した。

死骸は検視の上でひと先ずお徳に引き渡されたが、その場所が

御留川であるので、詮議は嚴重になった。藤吉の死骸には少しも疵のあとが無いので、おそらく覚悟して身を投げたものである。とは想像されたが、たとい自殺にしても一応はその仔細を吟味しなければならぬというので、女房のお徳はきびしく取り調べられた。それに対して、お徳も最初は曖昧の申し立てをしてしまいが、しまいには包み切れなくなつて、ゆうべの出来事を逐一に申し立てたので、草履屋の藤吉が越前屋の亭主と御留川へ夜釣りに行ったことや、その留守のあいだに怪しい女のたずねて来たことや、藤吉が一旦帰つて来て更に越前屋へゆくと云つて出たことや、それらの事実がすべて係り役人の耳にはいった。

越前屋の亭主はすぐに召し捕られて吟味を受けた。かれはその

名を為次郎と云つて、当年三十五歳である。女房のお新は二十七歳、小僧の寅次は十五歳で、一家はこの夫婦と小僧との三人暮らしてであるが、親ゆずりの家作三軒を持っていて、店は小さいが内証は苦しくない。世間の付き合いも人並にして、近所の評判も悪くなかつた。為次郎は役人の吟味に対して、自分はこれまでに草履屋の藤吉と誘いあわせて岡釣りや沖釣りに出たことはあるが、御留川の江戸川などへ夜釣りに行ったことは一度もないと申し立てた。それではお徳の申し口とまったく相違するので、役人はいろいろに吟味したが、かれはどうしても覚えがないと云い張つた。ゆうべは神田の上州屋という同商売の店に不幸があつたので、その悔みに行つて四ツ過ぎに歸つて来たのであると彼は云つた。念

のために神田の上州屋を調べると、果たして為次郎は宵から悔みに来て、四ツ少し前に帰ったということが確かめられた。

こうなると、役人の方でも何が何やら判らなくなつて来た。お徳は自分の亭主の云うことを一途いちずに信じて、為さんも夜釣りの仲間であると申し立てているものの、実はふたりが連れ立って出るところを一度も見たことはないのであつた。禁断を犯す仕事であるから、二人は忍び忍びに家を出て、どんど橋のわきで落ち合うことになつていたように聴いていると彼女は云つた。してみると、藤吉は何かの都合で女房をあざむいて、自分ひとり夜釣りに出ていたものかとも思われる。それにしても越前屋の亭主が鯉を釣り損じて川に落ちたなどという出たらめをなぜ云つたのか。そう

して、自分がなぜ入水じゆすいしたのか。又かの怪しい女は何者か、その女と藤吉とのあいだに何かの関係があるのか無いのか、役人たちもその判断に苦しんだ。

「どうだ、半七。あらましの本読みはこの通りだが、これだけじやあ芝居も幕にならねえ。なんとか工夫して、めでたく打ち出しまで漕ぎ付けてくれ」と、八丁堀同心の村田良助が半七を呼んで云った。

「かしこまりました。まあ、なんとかこじつけてみましょう。しかし御お寺じ社しゃの方はよろしいのでございませうな」

寺の門前地は寺社奉行の支配で、町まち方かたの係りではない。そこへみだりに踏み込むことは出来ないので、半七が一応の念を押す

と、良助はうなずいた。

「それは寺社の方から云つて来たのだから、仔細はねえ。どこまでも踏み込んで片付けてくれ」

四

「さあ、これからの筋道を順々に講釈しては長くなる。いつまでも聴き手を焦らしているのが能のうでもありませんから、ちつと尻切り蜻蛉とんぼのようですが、おしまいの方は手っ取り早くお話し申しましょう」と、半七老人は云つた。「それから五日ばかりのちに、この一件もみんな埒があきましたよ」

「はあ、どういうふうに解決がつかしました」と、わたしは熱心に訊きいた。「一体その怪談がかった女は何者ですか」

「いま時の方はまさか鯉の雌が女に化けて、自分の雄を取り返しに来たとも思わないでしょうが、昔の人間はみんなそう思ったんですよ」と、老人はまた笑った。「そこで、その怪談の主人公の女というのは、以前は西川伊登次いとじという看板をかけていた踊りの師匠で、今では高山という銀座役人の囲いものになって、牛込の赤城下あかぎしたにしやれた家を持って贅沢に暮らしている。銀座役人は申すまでもなく、銀座に勤める役人ですが、天下通用の銀を吹く役所にいるだけに何か旨いことがあるとみえて、こういう勤め向きの者はみんな素晴らしい贅沢をしていました。そのお気に入り

の囲い者ですから、伊登次も今は本名のお糸になって、表がまえはともかくも、内へはいつてみると実にびつくりするような立派な家に住んでいるという訳で、旦那の高山は三日にあげずに通つて来る。ときどきには同役や御用達町人ごようたしなども連れて来る。そこで、かの事件のあつた晩にも、高山は五人の同役をつれて来て、宵からお糸の家の奥座敷で飲んでいるうちに、いろいろの食道楽の話が出て、お糸は江戸川のむらさき鯉を一度食つてみたいと云い出した者がある。いやなに、普通の真鯉までも紫鯉でも別段に變りはあるまいという者もある。それが昂じて高山も、物はためしだ、おれも一度は是非その鯉を食いたいと云うと、酌をしていたお糸はなんと思つたか、旦那がそれほどに喫たべたいと仰しやるな

ら、わたくしがすぐに取つてまいりますと云う。これにはみんなも驚いて、さすがは高山の奥方だ。ほんとうにその鯉を取つて来て下さるなら、我々もその御相伴おしょうばんにあずかりたいものだと言つて半分がやがや云うと、お糸はどうぞ暫くお待ちくださいと云つて座を起つた。こつちは酔つていたので別段気にも留めないで飲んでいると、お糸はいつまでも座敷へ戻つて来ない。どうしたのだと女中に訊きくと、さつき表へ出たぎりで帰らないという。それではほんとうに取りに行つたのかとは云つたが、よもやと思つて笑つていると、やがてお糸がお待ち遠さままでございましたと持ち出して来た皿の上には、眼の下一尺あまりもあるうという大きな鯉こいが生きていて、しかもその鱗こけが燭台の灯ひにも紫に映つたので、

みんなもあつと驚く。高山は上機嫌で、なるほどお糸でなければ出来ない芸だ。方々かたがたも褒めておやりなされ、この高山も褒めてやるぞと、飛んだ陣屋の盛綱を気取つて、扇をあげて褒めそやすと、ほかの連中も偉い偉いと扇をひらいて煽ぎ立てる。いや、実にばかばかしい話ですが、昔はこんな連中がいくらもあつたものです。天下の役人がこの始末、まったく江戸も末でしたよ」

「すると、そのお糸という女が草履屋の店へ化け込んだのですね。それにしても、どうしてその鯉のあることを知っていたのでしゅうね」

これは私でなくとも当然に起るべき疑問であろう。半七老人はご尤もとうなずいて、又しずかに語り出した。

「それは自然にわかります。まあ、おちついてお聴きください。

この探索をはじめの時に、わたくしはきつとこの事件には魚屋さかなや

が係り合っていると睨みました。草履屋の亭主はどんなに鯉が好

きか知りませんが、自分が食うばかりでなく、どこへか売

り込むに相違ない。それには魚屋の味方があると思いましたが、

女房のお徳をだんだんに詮議すると、案のじよう、近所の川春かわはる

という仕出し屋の手でどこへか持ち込むことが判りました。川春

はなかなか大きい店で、旗本屋敷や大町人の得意場を持っている。

前に云ったような人間の多い時代ですから、旗本の隠居や大町人

の贅沢な奴らが川春の宇三郎にたのんで、御留川のむらさき鯉を

食うのがある。魚の味は格別に変りはないのですが、そこが贅沢

で、食えないものを食うという一種の道楽です。宇三郎はそこを
付け込んで、うまい儲けをする。しかし自分たちが迂濶に釣った
り、網を入れたりすると、商売柄だけにすぐに眼につくという懸ねん
念から、ふだんから心安い藤吉を抱き込んで、こいつにそつと釣
らせていたんです。

お徳の白伏でこれだけのことは判りましたが、鯉を取りに来た
という女の正体がまだわからない。そこで更に手をまわして探索
すると、この仕出し屋の料理番をしている富蔵という小粋な若い
奴が、高山の囲い者のお糸と出来合っていることを探り出しまし
た。富蔵はお糸が師匠をしている時からの馴染なじみで、今も内所で逢
い曳きをしている。それがわかったので、わたくしは子分の松吉

に云いつけて、富蔵が近所の朝湯に行つて帰る途中を引き挙げさせてしまいました。お徳の白状もあるのですから、すぐに宇三郎を召し捕つてもいいんですが、宇三郎という奴はなかなか食えなおやしい老爺らしいので、下手に当人を引き挙げて強情にシラを切つていられると面倒ですから、まず料理番の富蔵をおさえて、こいつの口から動かない証拠を挙げてしまおうと思つたんです。富蔵は案外に意気地のない奴で、ちよつと嚇かしたらすぐに何もかもしやべつてしまったばかりか、ほかに案外のことまで吐き出しました。それが即ちお糸の一件です。

草履屋に鯉のあることをお糸がどうして知っていたかと云うと、この富蔵の口から聴いたんです。その前の晩、近所の女髪結の家うち

の二階でお糸と富蔵とが逢った時、富蔵はいろいろの話のうちに、草履屋の藤吉が江戸川のむらさき鯉を内証で持ち込んで来ることを話しました。まだそればかりでなく、藤吉がだんだんに増長して、なにしろ御法度破りの仕事だから、今までのように一尾二分では売られない、これからは一尾一両ずつに買ってくれと云い出したが、宇三郎は承知しない。現にきようもそのもんちやく 拵 著 で、藤吉は一尾を売らずに帰ったという話をしたので、草履屋の家に一尾の鯉のあることをお糸は知っていたのです。お糸もその時は何の気無しに聴いていたんですが、その明くる晩に旦那の高山が同役を連れて来て、前に云ったようなわけで紫鯉の話が出ると、お糸は不ふと図とゆうべの富蔵の話をおもい出した。ここで一番自分の腕

を見せてやろうという料簡になつて、その鯉をすぐに取つて来よう
と安請け合いに受け合つた。当人の腹では、色男の富蔵にたの
んで、藤吉から売つて貰うつもりであつたんですが、あいにくに
富蔵はどこへか出て行つた留守で、川春の店にいない。と云つて、
立派に受け合つて来た以上、今さら素手すででは帰れない。見ず識ら
ずの草履屋へ行つて、だしぬけに鯉を売つてくれと云つたところ
で相手が取りあう筈もない。思案に暮れた挙げ句の果てに、思い
ついたのが怪談がかりの狂言で、そこらの井戸の水か何かで髪を
ぬらしたり着物を湿ぬらしたりして、草履屋の店へたずねてゆくと、
丁度に亭主は留守で女房ひとりのところ。こつちは踊りの師匠で
すから、身振りや仮こわいろ声も巧かつたんでしよう、なんだか仔細ら

しく物すぐく持ち掛けて、まんまと首尾よくその鯉をまきあげて行つたのには、芝居ならばこのところ大出来大出来というところかも知れません」

「いや、わかりました。なるほどお糸という女はなかなかの芝居師ですね。そこで、藤吉の方はどうしたのです」と、わたくしは追いかけて訊きいた。

「ここまでお話をすれば、あなた方にも大抵鑑定が付くでしょう。こうなれば、もう訊はありませんよ」と、老人はまだ判らないかと云うようにわたしの顔を眺めながら、息つぎの煙草を一服吸つた。

「わたくしは富蔵の顔を睨んで、やい、てめえの頸のまわりや手

の甲に引つかき疵のあるのはどうしたんだ。まさかに囲い者と痴話喧嘩をしたわけでもあるめえ。てめえ達はあの藤吉をどうしたと、頭から呶鳴り付けると、野郎め、蒼くなつて縮み上がつてしまいました。

川春の亭主の宇三郎という奴は、ぼてえ振りの魚屋から一代でそれだけの店に仕上げたくらいの人間ですから、年はもう六十に近いのですが、からだも頑丈で気も強い。藤吉が足もとを見てねだり掛けても、相手はびくともする奴じゃありません。藤吉はあべこべに云いまくらられて、そのくやしませに、お前が禁断のむらさき鯉を売り込んで、荒っぽい銭儲けをしているということ俺が一と言しやべつたら、ここの家うちにぺんぺん草が生えるだろう

とか何とか嚇し文句をならべて立ち去つても、宇三郎はおどろかない。そんなことを迂濶に口外すれば宇三郎ばかりでなく、第一にわが身の上が危ういから、藤吉は忌々いまいましいながらも我慢するよりほかはない。それで泣き寝入りにしていれば何事も無かつたんですが、藤吉にも金の要ることがある。その訳はあとで話しますが、その晩も夜釣りに行くと云つて家を出て、実は宇三郎の家へ行つて、もう一遍かけ合つてみる積りで、川春の店さきまで行きかかると、丁度に料理番の富蔵が表に立っていたので、それを物蔭へよび出して、きのうの喧嘩はわたしが悪かつたからおまえから親方によく話して、一尾一両の相談をきめてくれと頼んだが、富蔵は取りあわない。おれはほかに行くところがあるからと振り

切つて行こうとするのを、藤吉がひき留める。それがまた喧嘩のはじまりで、気の早い富蔵は相手の横つ面をばかりとなぐりつけると、藤吉はかっとなつて富蔵の胸倉を引つ掴むと、そのはずみに喉を強く絞めたとみえて、富蔵はそのままぱったり倒れてしまつたので、藤吉はびっくりして逃げ出した。

藤吉だつて悪い人間じゃあない、根は正直者なんですから、たとい粗相とは云いながら相手を殺した以上は、自分も下手人に取られなければならぬ。それが恐ろしさに、半分は夢中でそれからそれへと逃げ廻つて、夜ふけを待つて自分の家へうちこつそりと歸つて来たらしい。しかしなんだか気が咎めるので、女房にむかつて越前屋の為さんが川へ落ちて流されたなどと出たらめを云つた。

なぜそんな嘘ばなしをしたかというと、今も申す通り、なんだか気が咎めてならないからでしょう。犯罪人というものは妙なもので、自分の悪事を他人事（ひとごと）のように話して、それで幾らか自分の胸が軽くなるというような場合がある。藤吉もやはり其の例で、その時に何かそんなことを云わなければ気が済まなかつたらしいんです。女房はそれを真（ま）に受けて、早く越前屋へ知らしてやれ、と云う。今更それは嘘だとも云えない破目（はめ）になつて、よんどころなしに表へ出たが、もとより越前屋へ行くわけには行かない。そこでその後の様子を窺うために、川春の店さきへ忍んで行つて戸の隙間から覗いていた。勿論、死人に口無しで確かなことは判りませんが、前後の事情から推して行くと、そう判断するよりほかは

ないんです。

富蔵は一旦気絶したが、川春の店の者が見つけて内へ連れ込
んで、水や薬を飲ませると、すぐに息をふき返して、何事もなく済
んでしまったのです。そうと知ったら藤吉も安心したんでし
ょうが、間違いの起るときは仕方がないので、一生懸命に内の様子
をうかがっていると、そこへまた丁度に帰って来たのが亭主の宇
三郎です。近所の二階に花合わせや小博奕の寄り合いがあつて、
いい旦那衆も集まつて来る。これを内ないかい会と云います。宇三郎も
その内会に顔を出して、夜なかに家へ帰つてくると、表には変な
奴が覗いている。提灯の灯ひで透かしてみるとかの藤吉なので、こ
の野郎、今度はおれを殺しにでも来たのかと、襟首をつかんで内

へ引き摺り込む。藤吉はうろたえて逃げ出そうとする。宇三郎は追いまわす。御承知の通り、仕出し屋のことですから店には洗い場があつて、そこには大きい内井戸がある。普通の井戸とは違ひますから、井戸側が低く出来ている。藤吉は逃げ廻るはずみに井戸端で足をすべらせて、井戸側へよろけかかったかと思うと、さかさまに転げ込んでしまった。その騒ぎに店の者も起きて来て、すぐと引き揚げたが藤吉はもう息が絶えている。富蔵と違つて生き返りそうもない。といつて、迂濶に医者を呼んでは、あとが面倒です。宇三郎は家内のものに口止めをして、夜ふけを幸いに藤吉の死骸をおもてへ運んで、そつと江戸川へ捨てさせました。死骸は大きい御膳籠ごぜんかごに入れて、富蔵と出前持ちふたりが持ち出し

て行つたのです」

「では、紙屋の亭主はなんにも係り合わなかつたのですか」

「まつたくなんにも知らないんです。ふだんから藤吉と釣り仲間ではありましたが、鯉の一件には係り合いの無いことが判りました。御承知かも知れませんが、赤城下はその以前に隠し売女ばいたのあつたところで、今もその名残なごりで一種の曖昧茶屋のようなものがある。その白首しろくびに藤吉は馴染が出来て、余計な金なが要る。御留川の夜釣りも畢ひつきよう竟はそういう金の要り途みちがあるからで、女房の手前は毎晩夜釣りに行くように見せかけて、三度に二度はその女のところへ飛んだ夜釣りに出かけていたんです。そういう時は今夜はあぶれたと誤魔化していたんですが、それでも自分ひと

りでは何だか疑われそうに思われるので、釣り仲間の為さんも一緒だなどといい加減なことを云っていたらしい。紙屋の亭主こそ実に迷惑で、それがために思いもよらない災難をうけて、一旦は召し捕られたり、その後もたびたび番所へ呼び出されたり、どうもひどい目に逢いましたが、右の事情が判つて無事に済みました。川春の宇三郎は死罪、富蔵は吟味中に牢死、出前持ちふたりは追放だとおぼえています。宇三郎の白状で、鯉を食った者はみんな判つていゝんですが、身分のある人は迂濶に詮議も出来ず、大町人は金を使って内々に運動したのでしよう、その方の詮議はすべて有耶無耶うやむやになつてしまいました。高山もお糸も無事でしたが、この一件から富蔵との秘密がばれたらしく、お糸は旦那の手が切

れて何処へか立ち去ったようでした」

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（四）」光文社文庫、光文社
1986（昭和61）年8月20日初版1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：おのしげひい

1999年12月27日公開

2004年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

むらさき鯉

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>